「高井」第六十四号別刷

栗林遺跡第五・六次発掘調査

中野市教育委員会

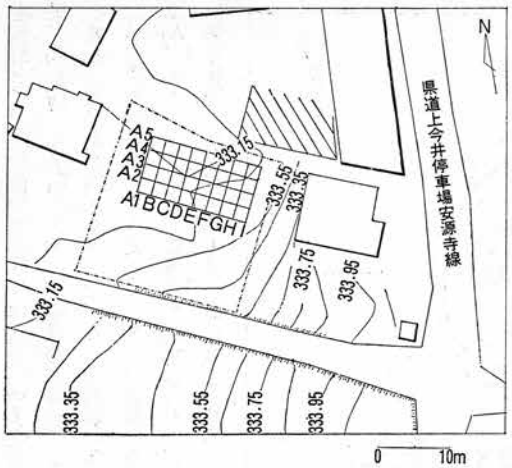
栗林遺跡第五・六次発掘調査

中野市教育委員会

一、第五次発掘調査

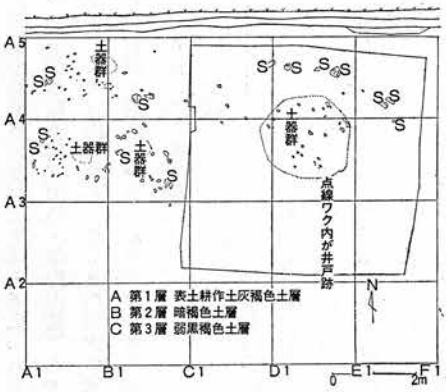
はじめに

栗林遺跡は県下に著名な遺跡で県史跡にも指定されており、地域内の開発行為の際には度々緊急発掘が行われている。今回も中野市栗林北原四八四ノ一・四八四ノ三番地、四九四㎡の土地に同所小林次郎氏が家屋新築を計画され、昭和五六年七月七日～二〇日にわたって、中野市教委が主体となって第五次緊急発掘調査を実施した。



第1図　グリット設定図

調査に際しては、県教委文化課の関、郷道両先生、及び山ノ内東小学校の田川幸生先生に諸々後指導を賜り、調査を終える事が出来た。梅雨明けの渋天の中、作業に御協力を賜った諸氏に厚く御礼申し上げます。なお、地形、環境の項は先学の報告書(1)に詳細に記述されていますので五六年度分調査報告には割愛させていただきます。

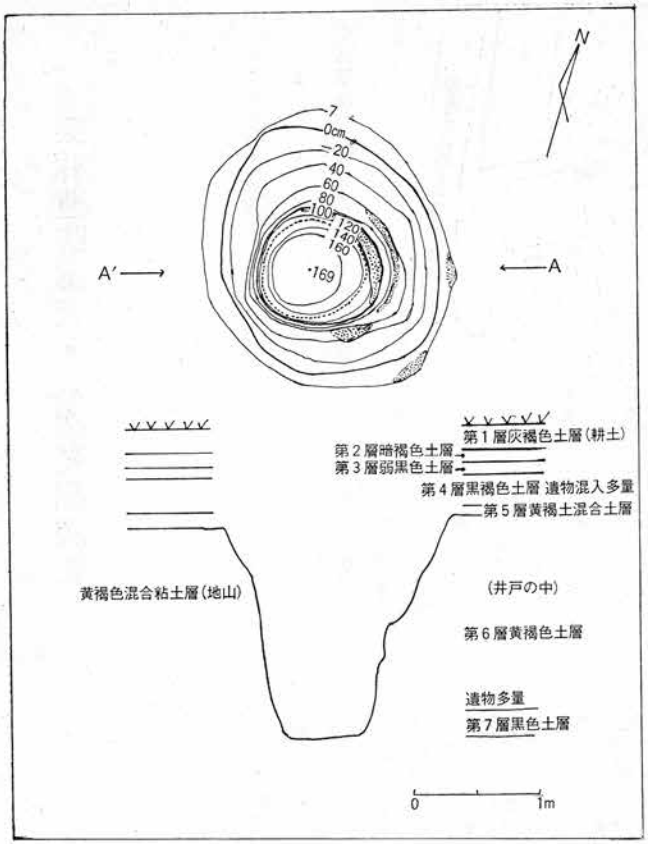


第2図　遺　構

遺　構

調査した面積は約八〇㎡である。A_3、A_4、B_3、B_4グリットを試掘し、その結果

を検討して、その他のグリットは約五〇cm表土を除いた。その結果、A_3—F_3、A_4—F_4のグリットに遺物を認め、こゝを重点に精査する事とした、またD_3グリットを中心に土拡状の落ち込みが認められたが、調査が進展するに従って井戸状の遺構となった。また土器片はA_5、A_4グリット附近に濃厚な出土が見られたが、個体として確認出来る状態になく、栗林I式土器から、箱清水式土器片まで混在した状態で発見されたが、主体と考えられる土器片は百瀬式併行土器で（栗林四類土器、田川・中野市誌）あった。土器片の下からは遺構などは確認出来なかった。また調査出来なかった部分は宅地造成で、前面の道路と均平な埋立工事を施工されるので、遺構が保存される状態にある事を附記する。



第3図　井戸状遺構実測図

井戸状遺構

本址は確認面において一・九五m×二・三mの楕円形の平面で、底部に円形に近く、直経は〇、五㎡内外である。断面形状は深鉢形で、深さは、遺構確認面より、約一・七m、表土面より約二・五mである。中途に五段の足がかりと思われる段を有し、最下の段はやゝ広くて足がかりが充分出来る状態を示す。遺構面より一・五m下までは、黄褐色混入土層で以下底部まで黒色の泥状粘土で、遺物は、全体に包含されていたが、特に底部より、〇・三m附近に多く発見され、底の部分より席状の有機物が土に密着して残存したが、取上げ保存する事は不可能であった。特に底部の土は粘質が強く感じられた。七月の時点で坦水面は深さ〇・三mで汲みあげても一晩で元の位置に回復していた。渇水期には常用として使用出来るか疑問で、五四年の確

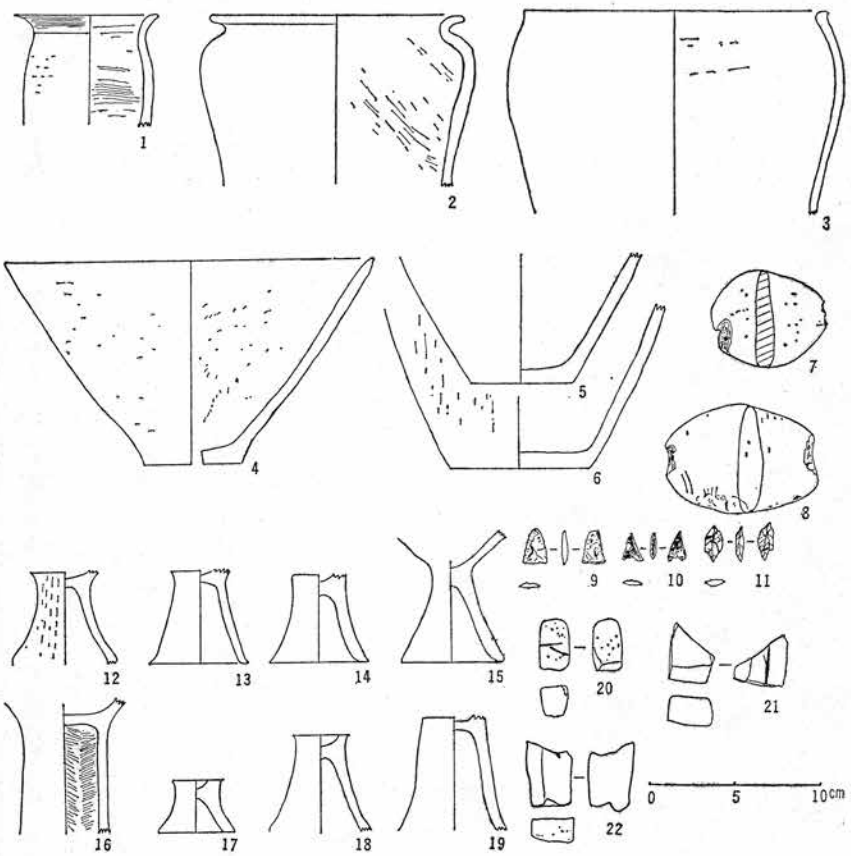
認調査の井戸、附近の井戸を見ると五―六mの深さは必要のようである。こうして考えると一種の貯蔵穴とも考えられるが現時点では、この外の傍証資料もなく、井戸状遺構として報告しておく、また掘削され廃棄された時期は、底部附近より発見された塗彩された高坏の脚部や、甑の型態より箱清水式文化の時期と推定される。

遺物

井戸状遺構出土品（第4図）

〔高坏〕12―19、16が井戸上層部より検出

第4図　井戸状遺構から遺物の出土状態



第5図　遺物実測図

されたのみで17—19は、深さ二・一m附近、12—15は深さ二・三七m附近より検出された。13・15・16・18は脚部内部までも赤色塗彩される。14・17・19は器面が剝離され詳細不明である。この中には、台付甕の下部分と疑われるものもある。これらは弥生式文化中期最終末の百瀬式期から後期箱清水式期に編年されよう。

〔甕〕4　深さ二・五七m附近より発見されたもので内外面に剝離痕が見られ、煤状の附着があり、胎土には砂粒がやや多く認められる。

〔甕〕　2・3は深さ二・三七m、6は深さ二・六mの出土で2は折返し口縁が僅かにあり、口唇部に、LR縄文を押捺して胴部には斜状に平行櫛描文が僅かに残っている。3は折返し口縁の無いもので、6は甕形土器の下半部で内面は煤状の附着がある。2は栗林Ⅱ式、その他は箱清水期に相当しよう。

石器では中形の閃緑岩の蛤刃石斧の頭部が深さ二・三七mより出土した。頭部が使用されて一部剝離された後、磨きなおしてある。8の石垂は深さ一・六五cmの出土、21の砥石は井戸上層の検出である。

グリット出土品

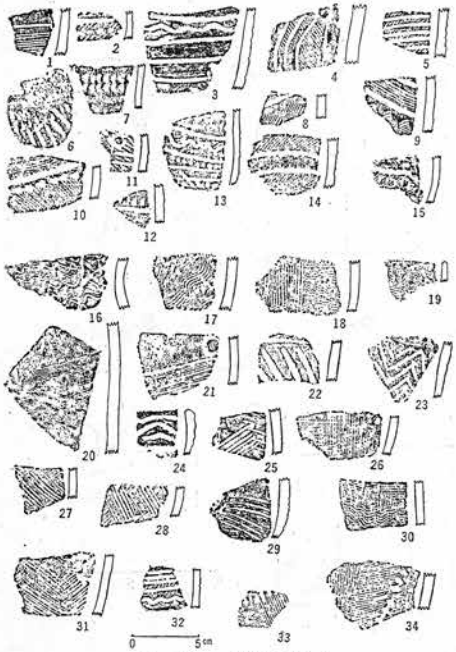
1は小形甕形土器でA_3より、5はC_4より発見された砂粒の多い下腹部のみの土器、7の石垂はB_2、20は砥石でA_3、22の砥石はH_4から検出された。石鏃9は蛋白石で快入部のない薄い作りで、10は黒耀石製、11は安山岩製の粗製の有柄鏃である。

その他図示しなかった石器では、中形の蛤刃石斧がB_3とC_4から出土した両者とも頭部破片で折損面が斜状を呈し、井戸状遺構出土品の輪切状折捐形と分類される。また先端部両面に使用痕のある円礫石、扁平楕円な川原石の凹石など検出されたが、量的に注目されるのは安山岩の扁平で厚さ三㌢以下で大きさが一〇—一五m内外の打裂痕のある石で中には火熱をうけているものも存在する。（今回は十個検出）

これは第一次発掘以来、注目されているが、文化の所属、使用目的など、究明されていない。

出土土器片

井戸遺構出土は4・10—12・14—29でグリット出土は1A_3・2B_3・3 32 33 44 C_4・5 6 30 31 D_4・13 E_4のグリット出土である。篦描文



第6図　土器拓影図

は太形と細形があり、磨消縄文LRを伴うもの（2・5 13・14）と櫛描文を伴うもの（198）山形連続にえがかれたもの（23 25）などがある。櫛描文の系統は16—21・26—31・33 34で34は二単位の線書き櫛描文A、七単位で線書される20 26などは櫛描文Bで波状文16 17 20 30・平行文26など、ボタン状貼付文あるもの4 11 21、断絶痕のあるもの30、刺突文あるもの33 34などで栗林I式土器に伴うものが多く図示したが、前にも触れた如く、今回出土土器の主体は百瀬式併行土器、続いて箱清水式土器片であったことを附記する。

むすび

今回の発掘調査について簡単に所見を述べると、遺構・遺物のあり方が二次的作用をうけて良好な出土状態を示さず、第三次発掘[2]に於いても同様な結果がみられる。これらは遺跡の立地が、古代から人類をはぐくんだ母なる川、千曲川沿岸に所在する為、各時代の人々の往来、居住する結果に起因する部分と自然の力の相乗作用がしからむる結果と思われる。北信の弥生中期後半に位置づけられる。当遺跡では現時点に於いて、I式土器には櫛描文土器と縄文晩期亀ヶ岡文化圏の所産の篦がきの磨消縄文土器が伴出し、これ以前の様相を示す、良好な遺物、遺構は検出されておらず、千曲川旧河川に沿って一五〇〇mに及ぶ広い遺跡に今後の調査が期待される。

注1　林茂樹・金井汲次・桐原健、「長野県中野市栗林遺跡第三次調査概報」信濃Ⅲ18—4昭41　中野市教委「栗林遺跡確認緊急調査報告書」昭55など参照

2　注1の前掲論文。

調査関係者

責任者	中野市教育長	菅沼利男
調査主任		檀原長則
市教委		土屋練太郎
〃		藤沢袈裟雄
〃		岩戸啓一
調査員		池田実男
調査補助員		小林軍司
〃		割田市太郎
〃		海野福松
〃		小野沢京二
〃		下田由人

多大な協力をいただいた地主小林次郎氏に末筆ながら深く感謝申し上げます。

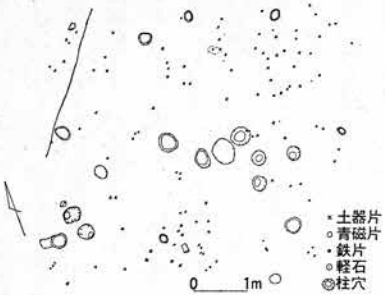
（檀原長則）

二、第六次発掘調査

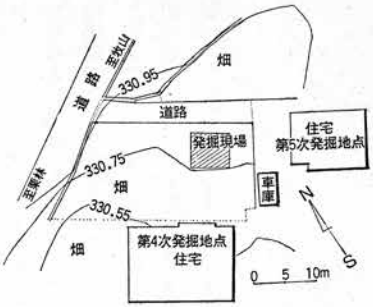
はじめに

今回は昭和五六年一二月一八日—二〇日の間、中野市栗林四四一ノ一四番地、大俣の浅沼光義氏の所有地の家屋新築の為に第六次の緊急発掘調査を行なった。初冬ではあったが幸い好天に恵まれ、調査が進行した。調査地点は第五次発掘地点のすぐ西隣りで、その調査との関連の発見が期待されたが、あまり成果はなく終った。

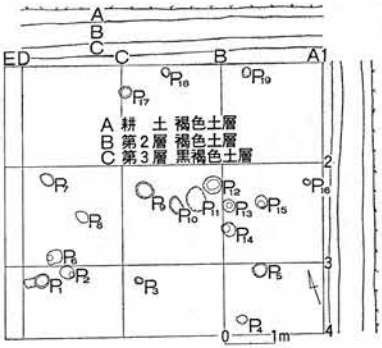
遺構



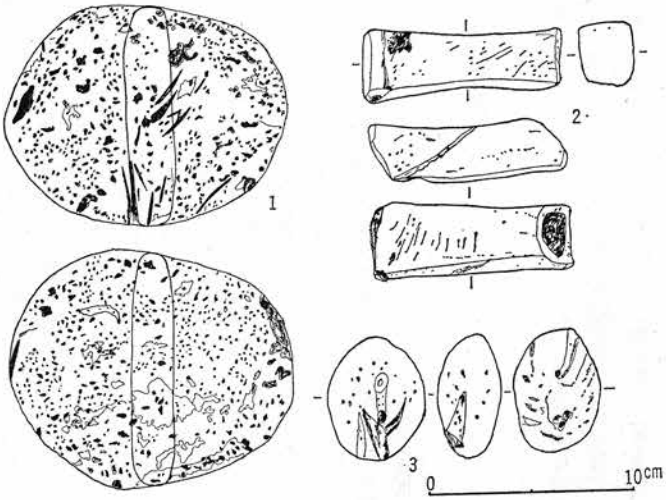
第8図　遺　　構



第7図　附近測量図



第9図　柱　　穴



第10図　石　製　品

六・三五m×五・四五mの小面積の発掘で地下〇・五m附近より、遺物の発見があり、柱穴と思われるものが一九個所発見されたが、建物址として確認する迄には至らなかった。

遺　物

栗林I式土器片から、箱清水式土器片まで二二六片、土師片は四片で鬼高期の皿が、器形の判明する唯一の資料である。須恵片一〇個、灰釉は一片、青磁片は三片を数え舶載品と思われるが、折損面は大分磨滅している。鉄片は二片で、五ミリ角の長さ八・八cmの犬釘状を呈し頭部が欠損しているものと不明鉄片一個である。軽石（第4図3）六cm×四・四cmの最大厚さ三・二cmの楕円形で穴が二個並列にあけられるが片方は未貫通に終っている。焼石（第4図1）楕円形の安山岩の河原石で先端部に敲いた痕があり、褐色から、黒褐色で火熱をうけて変質している。砥石（第4図2）検出位置が、表土より三〇cmの深さで、長さ九・五cm、三・cm×三cmで重量一八〇gで四面とも使用痕があり、やゝ平面なのは一面だけで他は彎曲した状態を示めしている。

調査関係者

中野市教委　藤沢袈裟雄
〃　岩戸啓一
〃　小野昭男
中野市文化財保護協力委員　池田実男
調査主任　檀原長則

五六年度の報告書の図版作製は、池田実男が当った。遺物と詳細な記録は中野市歴史民俗資料館に保管してある。（檀原長則）